

●春日部市民文化講座（第 31 回） 「日本人が育んだもてなしの心 一侘茶の修道一」

◆日時：2019 年 10 月 30 日(水) 10 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■日本人が育んだもてなしの心—侘茶の修道

今日は「日本人が育んだもてなしの心」を主題にお話してまいります。東京がオリンピックを招致した時に、先日、政治家と結婚された美人のキャスターが「お・も・て・な・し」って言ってから、随分と日本に「おもてなし」という言葉が流行りましたが、これは昨日や今日のことでなく、ずっと以前から日本人の心に育まれていたものです。私は縄文時代から日本人の心には「おもてなし」の精神が育まれていたと理解しています。そんなことを心に留めながら今日のお話をさせていただきます。

■柳宗悦（やなぎむねよし）の民藝運動から

今日、お話することは、私が表千家で 40 年以上にわたって修道させていただいてきた中で感じていることでもあります。千家十職（せんけじゅっしよく）と呼ばれる人たちがいます。千利休の孫・宗旦の子から続く表千家・裏千家・武者小路千家と呼ばれる三千家が好みとする茶道具を作る職人たちで、陶器師・塗師・指物師などの人々です。ぼくたちからすると、とても遠いところにいた人々です。そういう物づくりの世界に社会的に大きなインパクトを与えた人が柳宗悦という人です。「民藝運動」で有名な方ですが、皆さんの中にも「民藝運動」を知っている方はいらっしゃるでしょうが、そうですね。民藝運動に参加した人々は作者の名前なんか知らない、書かないのです。ただ職人だから名を書かなかったという意味ではないのですよ。彼らはいつもその作品を作っていて、使った人々は壊れたらまた飽きずに同じ物を買ってきて使い続ける、そうした繰り返しを綿々と続けてきた歴史があり、作家や千家十職じゃなくても素晴らしい作品を造っているじゃないか、その心眼を開こうよということを言い、多くの論文を書き、多くの人たちに影響を与えた人が柳宗悦なのです。今、東京に「民藝館」という立派な美術館があります。この民藝運動を起こした柳宗悦は、それまでの美意識に対して一つの挑戦をした人だと思います。

■自分の心眼で美味しいと思う道具を

柳宗悦さんが民藝運動を通じて「道具は誰が造ったかということではなく、自分自身の心の眼を開いて見ようよ。自分が見て良いと思ったものを選んで使おうよ」と仰ったことが非常に神秘的です。道具屋さんや誰が造ったかというネーミングとか、人の権威ではなくて、自分の心が惹かれて共感するものを自分が持つようにしようよ。そして、飽きたらその道具はそれだけのものなのですよ。だけど本物には飽きさせないエネルギーがありますよ。皆さんもそういうこだわりのある物をお持ちだと思います。利休さんに 7 人のお弟子がいました。「利休七哲」と呼ばれていますけれども、これは 4 代目の江岑宗匠が「江岑夏書」に宗旦から聞いたこととして書き遺したのですが、7 人の弟子の名前が明らかになっています。その 7 人は本当に他人をもてなすことのできる人々で、利休さんはこの 7 人に自分のもてなしの心を伝えたのです。今、ぼくたちは侘び茶について関心を持ってこの場に集まっていますが、侘び茶というのはもてなしの心ですから、自分が美味しいと思うお菓子とお茶を用意して、皆さんに召し上がっていただくこと、それだけだと利休さんは言っているのです。利休百首は後世の人が作ったものかも知れませんが、「茶の湯とはただ湯をわかし茶をたててのむばかりなる事と知るべし」なのです。自分が美味しいと思うお菓子とお茶を差し上げようって嘘いつわりのない心、ありのままの心「赤心」を求めているのですよ。

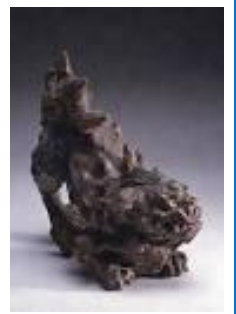
■家元制度は江戸中期の如心斎から

レジュメに家元制度が育てた道具と書いたのですが、実は家元制度というのは利休さんが造ったものではないのですよ。家元制度は、表千家でいえば中興の祖といわれる表千家七代の如心斎（じょしんさい）という方が作ったのです。その如心斎が何をモデルとして家元制度を確立したかという天皇制です。現在の天皇制では皇位継承順位というのはあり、天皇を継承できるのは男子に限られています。同じように三千家のお家元は男子に限られています。そして、お家元好みの道具を造り、それに相応しい袋や箱を造り、後世に残る道具を作っているのが千家十職だということです。それに対して柳宗悦たちは違う価値観を唱えていったのです。

■千家十職と樂家

今日の本題である千家十職についてお話してまいりましょう。千家十職を見ますと、奥村吉兵衛（表具師）、黒田正玄（竹細工・柄杓師）、土田友湖（袋師）、永樂善五郎（土風炉・焼物師）、樂吉左衛門（茶碗師）、大西清右衛門（釜師）、飛来一閑（一閑張細工師）、中村宗哲（塗師）、中川淨益（金もの師）、駒澤利斎（指物師）の十人の職家です。茶碗師の樂吉左衛門ではなく、土風炉・焼物師の永樂善五郎の方が上に出てくるのです。永樂さんは、皆さんが好きな京焼きの綺麗な焼き物のオリジナルを作ったのです。表千家の場合ですが、家元制度になり十職が定められたのは徳川時代で、徳川家とどのように繋がりがあるかで順番が決められたように思います。永樂さんは初代から 10 代までは西村姓を名乗っていたのですが、11 代保全が 1827 年に紀州徳川家から「永樂」の

銀印を拝領して用いるようになってから永樂姓を名乗り始めたので、こうしたことが三千家に共通した価値観なのですね。樂家は、長次郎の流れです。利休さんの手になって侘び茶の茶碗を造ったのです。長次郎は謎の人で、韓国系だという人もいますし、15 代吉左衛門さんなんかは中国系でしょうと仰っていますし、良く分かりません。長次郎は戦国時代に日本に来て、最初は瓦を焼いていたのです。しかし、凄い能力があったのです。その能力は樂家に代々伝わっている**獅子像**【写真：二彩獅子／長次郎作／文化遺産オンラインより引用】の焼き物に見ることができます。15 代の樂さん曰く、人間的にも優れた人だということが作品を見て分かるそうです。ぼくの説として「利休さんが瓦職人の長次郎と出会ったのはやはり堺の町だ」と堺の学芸員の人たちに話していたら、堺で長次郎の黒茶碗などがたくさん発掘されたそうです。一度堺に行ってみてください。堺の美術館に展示されていて見る価値があります。学芸員の方たちも長次郎が堺に居たと思ってくれているのですが、証拠がないのです。樂家では手捏ね(てづくね)という轆轤を使わない独特の手法で焼き物を作り出すのです。しかも、父親から子に教えることがないそうです。



■千家十職とお家元制度

樂吉左衛門さんのお話ですと、15 代の樂さんもお父さんの 14 代から作品の作り方や釉薬の調合さえも教えてもらっていないそうですし、長男の 16 代にもそういったことは教えないそうです。不思議ですよ。でも、あの釉薬は奥様が代々受け継いでいくそうです。ですから、15 代の作品の釉薬は全部奥様が調合して作っているそうです。釉薬の材料となる原石は 15 代ご本人が拾ってくるそうで、3 代先、4 代先までの原石が土などと一緒に庭に置かれています。そういうのが樂家です。ここでこの旦入の茶碗について説明します。実は利休さんが所持していた瀬戸黒茶碗「小原木」【写真：大正名器鑑より引用】という重要文化財の茶碗があります。この茶碗は現在、表千家にあります。この「小原木」が重要文化財[2011 年 6 月]になる 3 ヶ月前に、この旦入作「小原木写し」のお茶碗がぼくの処に流れてきたのです。旦入の茶碗は、



この曲げわっぱのような入れ物に入っていて、ここに旦入が書いた箱書きがあります。この茶碗も 150 年以上経っているのです。そしてその後に木箱を作って、15 代の樂さんに「このお茶碗は確かに旦入によって造られたものです」と極めていただき箱書きをしてもらいました。袋は千家十職の袋師、土田友湖です。写しといえども凄いお茶碗です。皆さん、後でそっと手に持ってみてください。この曲げわっぱも桐箱も、千家十職の



一人で指物師の駒澤利斎なのですね。萩焼の茶碗を坂田泥華さんの処で求めてきて、ぼくが住んでいる春日部には桐箱を造る人たちがいるので、春日部の職人さんに頼もうと思っていたら、お家元は「ああそう」と言われてしまったのです。お家元とすれば、全部十職で通したいのでしょうね。お家元制度というのはそういうことなのですね。そういうことに対して、ぼくは抵抗してきました。例えば、表具という奥村吉兵衛なのですが、家元の書をいただいたので、教会に来ている江原小林堂にお願いして表装したことがあります。お家元とすれば、十職に出したかったのでしょうがねえ。実は、お家元制度というのはそういう世界なのです。十職を使うことで家元制度が安泰になるのです。でも、萩茶碗の箱書きをお家元をお願いしたら、「待望」と書かれて 10 日くらいで送られてきました。お家元が「初めて書く字だ」と言ったということも伝わってきました。こういうふうに、良いお茶碗を造り、それに相応しい袋や箱を造り、後世に残る道具を作っているのが千家十職だということです。釜師の大西家では素晴らしい美術館を持っています。私の処では高橋十職がいて、釜師は江田恵さんなのです。江田さんは天命釜を再興するために佐野に移り住んでいます。一閑張細工師は飛来一閑ですけれども、こちらは紙を重ねて作る茶器や菓子器などの作品ですね。柔らかいんですね。塗師の中村宗哲の現在は女性ですが、武者小路千家と関係が深いですね。武者小路千家の初代が塗師の家に養子に入り、その家が中村家だったのです。竹細工・柄杓師の黒田家も現在は女性です。去年、正玄さんに利休型の白竹実竹の茶杓を頼んだのですが、お家元からお断りが来ました。そんなことがありました。作家さんが作りたいと思っても、それをお家元が「いかなものでしょうか」と一声掛けると作ることができないというのが家元制度の権威です。十職はお家元の言葉に従わなくてはならないのです。正玄さんから長い手紙をいただきましたが、ぼくは涙がでるような手紙でした。そして、正玄さんにとっても初めて

の経験だったそうです。コピーといえども、千家十職の人たちは家元の意見を無視できないのですね、それが家元制度なのです。先ほどお話しした表具師の奥村吉兵衛ですが、表具師は千家十職に入っていますが、日本伝統工芸展の部門には表具はありませんね。表具にしても裂(きれ)なんかは凄い織物じゃないですか、でも入っていないのです。このレジュメにも「茶会でメインになるのは床の間の軸だ」と書きましたが、ちょっと言い過ぎじゃないかとぼくは思いますね。それというのも利休さんが最晩年に行った「利休百会記」を見ると、軸を使っていない茶会があるのです。床の間のない茶室も造りました。例えば、細川護熙さんが凄い小間の茶室を造りましたが、床の間がなくて壁に軸や絵を掛けられるような工夫はされています。湯河原にある素晴らしい茶室です。彼はそこで細丸印のお茶碗を造っています。ですから、利休さんは軸をどのように理解されていたのかがぼくの疑問です。利休さんがたくさんの軸を持っているにもかかわらず、茶会で軸を飾らなかったのか。その時は、亭主そのものを見せる軸なのだと思いますね。そう考えると、そういう時は床の間の軸に挨拶するのではなく、亭主と客が心を通わせて挨拶することが大切なんでしょうね。それが最高の茶会であり、おもてなしではないでしょうか。「水継ぎやかん」って、ぼくらは何気なく使っているけれども、あれは利休さんが採用したものなのですね。そうしたものを中川家が造っているのですね。細かな細工物は中川浄益が造っているのですね。そういう職人さんたちがいて、三千家の好みの品が造られているのですね。阿吽の呼吸で造られているっていうけれども、実は話し合われていると思いますね。「好み」って何でしょうかねえ、これは感性の世界なのです。「好かん」、どうも好きじゃない、それはその人が生まれ持ってきた生活によるものでごまかしが利かないものなのです。

◆お客様の質問に答えて「待庵」と「黄金の茶室」

「待庵」は二畳の茶室で薄暗く造られています。そして木材は高山右近の目利きで運ばれたものなのです。「待庵」が建てられている山崎の隣は高山右近が城主であった高槻になります。言い伝えによりますと、「天王山の戦い」とも呼ばれる山崎の合戦で明智光秀を羽柴秀吉が破り天下を治めました。その戦勝祝いとして山崎の地に茶室を造りたいというので利休が建てたのが「待庵」です。でも、場所は今の場所より山間だったとも言われていますが、そういう歴史を感じて、高山右近が目利きした柱はこれかなあなんて思ったりして、歴史の中にいる自分を感じた時に涙がこぼれてきたのですね。利休さんは「待庵」の二畳を造って、さらに一畳半の茶室まで極めていったのです。たぶん切腹したのは一畳半の茶室だと思うのですが、遺体が横たわり、それを弔う1人が座ることのできる空間が一畳半なのです。だから、利休さんが四畳半から一畳半まで切り詰めていったのか、そして、あんな木造のぼろ屋が400年も残っているのです。そんなことを思うと心が熱くなってきましたよね。こうした建物を管理することは大変な努力ですね。「待庵」はお寺さんが管理し、「如庵」は名鉄が管理していますが、管理者が変わると荒れてしまうのです。茶室を守ることを使命としている人が管理しないと茶室は荒れてしまいますね。ご住職の奥様が「家元が来られてもすぐには入れません」とおっしゃっていた「待庵」は荒れていませんね。それほど心を込められて管理されている「待庵」に15回位通っていますが、最初に「待庵」に座らせていただいた時のあの涙は、利休さんと共感した涙だったのかも知れません。一方の「黄金の茶室」。ぼくは熱海のMOA美術館の「黄金の茶室」に入り暫く黙想し、金々キラキラの茶室でしたが、この茶室は利休さんの手による茶室だと思いました。秀吉から「黄金の茶室」を造るように言われ、それを拒むのでは無く、自分の好みで造った茶室だと思いました。異質な茶室なのですが、金々キラキラの茶室なのに、削ぐところは削いでいるので利休さんがおもてなし出来る空間が「黄金の茶室」でした。ここには春日部在住で漆芸の人間国宝の増村紀一郎さんのご縁で入らせていただきましたが、国宝「如庵」でも掃除のおばさんと親しくなって茶室に入らせていただきました。イエス様も「心が貧しい人は幸いです」と言っていますが、ぼくは心を貧しそうにしているので、こうしたチャンスが流れてくるのですね。ぼくは今、貧しいからこそ、天の神様からの恵みをいっぱいいただいているのです。言うなれば「乞食根性を赤心をもって現すこと」でしょうか。利休さんは、茶室までの露地をそういう意味で造ったのですよ、露地というのは「裸になる場所、裸の道」ですよ。何を着ていても、刀を差していても躡り口の外に置いて、躡り口を通ったらみんな一緒、平等なのです。しかも、お濃茶はみんなで回し飲みするのですよ。

■千利休の遺偈と高山右近の遺言

そして「利休の遺偈」です。この遺偈は、利休さんが最後に書きとどめたもので、表千家では神聖なものです。この「遺偈」を誰に向かって書いたかという、利休さんが自分自身に向かって書いたものです。自分が死ぬにあたって、人生70年云々と書いてあります。そしてそれを利休さんは、自分が組み上げた侘び茶の世界を天に抛(なげ)うつというのです。もう一つが高山右近の「日本訣別の書状」です。高山右近は大名でしたが、豊臣秀吉のバテレン禁止令によって大名を捨てて、金沢の前田家の客将となり手柄を挙げたのですが、徳川家康の禁教令によって日本から追放されることになりました。その時に細川忠興に宛てて送った最後の手紙です。高山右近は

友人であった細川忠興に向かって「おれは流されて忘れられていく 60 数年の人生を君はどう思う」と、「如何に」と問うているのです。ですから、これは人に向かった「遺言」で、感謝と自分の死を見詰めての「遺言」なのですね。右近は、宣教師たちとマニラに流されて 40 日後に亡くなりました。だけれども、死んで 400 年近く経って彼は日本人キリスト教徒として世界に誇るべき人であり、模範となるクリスチャンだということでローマ教皇を中心とするカトリック教会は 2015 年に「**福者**」の称号を与えました。福者というのは、カトリック教会において、死後その徳と聖性を認められた信者に与えられる称号で、聖人の一步手前の称号です。ですから、彼は 400 年経って名誉挽回をしているのです。名も忘れられて、大名の地位も財産も全て流して、家族だけが一緒にマニラに行きましたが、江戸時代には全てを流して忘れられてしまいました。一方、千利休は切腹した後に、京都堀川に架けられている一条戻橋に首を曝されたのです。ですから、完全にお家断絶だったのですね。ところが今でもお家が続いているのは、蒲生氏郷が利休さんの子・少庵を匿い、徳川家康と一緒に仲裁に入って秀吉の勘気を解いて京都に戻されたのですね。そして、千家は再興されたのです。ですから、千利休は少庵による千家再興によって汚名が晴らされたのです。そして今までずっと続いているのです。

■和敬清寂

侘び茶のポイントである「和敬清寂」です。「和敬清寂」の中で一番大切なことは人それぞれに異なりますが、**高山右近にとって大切なのは「清さ」**なのです。茶の湯の「清さ」です。そして、彼のお茶は清かったと思います。その「清さ」について、織田有楽斎が高山右近のお茶を見詰めて「右近のお茶は清めの病を患っている」と揶揄したほどの潔癖症でした。でもぼくは、織田有楽斎もキリスト教徒であって、高山右近の茶の湯を見抜くことが出来る心眼が開かれていたからこそ、「**清めの病**」というような言葉を遣したのだと思います。

■三口半で感謝していただく侘び茶

最後になりましたが、お濃茶を三口半でいただくということをずっと考えてきました。これを決めたのは利休さんなのです。一碗のお濃茶が出されたら、例えばそれぞれが 3 人前であれば、3 人が三口半ずつで均等にいただくのです。お家元のお茶はだいたい 5 人分ですね。熱くて美味しいお茶をいただくのですが、さすがお家元と思う美味しいお茶です。これはぼくらが真似しようと思ってもできないのです。一人前がお濃茶は 3 杓、お薄が 1 杓半なのですね。1 杓というのは量ったグラムではなくて、目分量なのです。茶杓によっても盛り方が変わりますし、湯の温度や量によって毎回異なるのですが良い具合に練られて出てくるのです。それをぼくたちはいただきます。まず感謝して、それから三口半で飲むのですが、その時に付度するのです。決して一人が飲み過ぎないように飲むのです。それを「**三口半で飲みなさい**」というのを利休さんが定めているのですよ。それはもてなされる側の心得なのです。ぼくは高山右近もそうだったということを黙想して思いました。利休さんの侘び茶というのは、お濃茶を三口半でいただくということでもあるのですよ。利休さんも創造者としての神様を知っていたのです。その証拠はエデンノ園でエバが禁断の実を取るところが描かれた蒔絵の小箱を持っていたのです。これが徳川時代に見つかっていたら大変なことでした。これが利休 400 年忌の時に家元の所から初めて披露されたのです。ぼくも而妙斎お家元から本物を見せてもらいました。まさしくエデンノ園で人間が神様からやってはいけないと言われていたことをやってしまった瞬間、「オリジナル・シン(原罪)」という万国共通のキリスト教教義で、人間は皆等しく罪を持っているということです。罪というのは神様に背き、神様に素直に従う心を失ってしまったという状況なのです。その小箱を持っていたのです。ということは、利休さんも高山右近と同様に、この天地は偶然にできたのではなく、神様によって創られたということを知っていたのではないかと思います。そして、神様は憐れみ深い方と聖書に規定されているのですね。憐れみ深いとは、いつもぼくたちと一緒に居られて共に苦しんでくださる方という意味なのです。だから、ぼくがお濃茶を飲むときに、一口目は「**御父(みちち)の憐れみ**」と言っていただきます。お茶会では、亭主から「いかがですか」と聞かれるので、「うまいよ」と答えますが、その時ぼくには御父の憐れみが体に入っているのです。二口目は、「**御子(みこ)の贖い**」と言って飲みます。贖いというのは全部の罪を許してくれるということとてつもないことなのです。三口目は「**御霊(みたま)のとりなし**」と、とりなしとはいつもぼくのための助け主、弁護者、味方のことを言います。原語ではパラクレートスと言われます。聖霊なる神様は、ぼくがどんな人間でも、私はあなたが好きだよと言い続けてくださっているのですね。それはぼくの自信になるのです。ぼくが失敗したり、がっかりした時でも聖霊なる神様が助けてくださるんだと思えることは、生きる希望になるのですね。だから「御父の憐れみ、御子の贖い、御霊のとりなしがあることによるぼくが存在している感謝です」と言って今朝もお濃茶をいただきました。そして、**最後にすすって三口半なのですね**。これが、ぼくの茶の湯の修道です。この姿は高山右近を真似たものです。

物事を心眼で見えていくと高橋先生のように全ての事柄が、点と点が線で繋がり面として広がるのですね。